

『わたし』 星空 未来

わたしが みかんをむくと
オレンジじゅーすになっちゃうよ

わたしが文字を書くと
ミミズみたいで読みにくいよ

わたしが口紅付けると
上手にぬれなくて はみてちゃうよ

でもね でもね それでいいの
だって それが わたしなんだもん

私が歩くと 酔っぱらうって
言われるよ

わたしがご飯 食べると
ご飯たちが喧嘩して 食べにくいよ

わたしがお喋りする
ロボットみたいで 聞きにくいよ

でもね でもね それでいいの
だって それが わたしなんだもん

だって それが わたしなんだもん

この詩は「ともの家」の仲間の星空未来さん(ペンネーム)の作った詩です。

星空さんは脳性麻痺で、体を動かすことや話すことが大変です。

星空さんは別の詩でこうも言います。↓

『歩んでいこう』

● もっと、自由に手足が利けば 良かった
筋緊張しないで しゃべれるようになりたかった
子供を産んで育てたかった
富士山に登りたかった
車の運転したかった
世界中を旅してみたかった
海外に住みたかった
死にたいと思ったことも・・・
● 上手くいかないこと 今も いっぱいある
生きていって 大変なこと でも
死んじゃうことは 最低だよ
上を見ても 仕方なく
下を見ても きりが無い
命ある限り 自分の歩幅で
歩んで行こう

命ある限り

未来さんの詩集「思いの詩」の一ページ

法人の願い

懸命に生きる仲間たちを支援し、 良い介護・保育・生活支援を

最期まで元気で自分らしくありたいと願うお年寄り、友だちをつくり、たくさん思い出を作りたい幼児期を過ごす保育園児、毎日の生活パターンの変化になじめなかったり、自分の思うようには動かないからだで懸命に生きるなかまたち。

社会福祉法人清水あすなろ福祉会はこうした人たちを支援し、少しでも良い介護、良い保育、良い生活支援ができるよう努力しています。

しかし、財政赤字を理由に医療、福祉は水準の後退を余儀なくされています。

保育の分野では、新安心子育てプランが数あわせの保育で無資格保育士による保育を常態化しようとしています。介護保険は、適用範囲がどんどん狭まり総合支援事業へと移されて、サービスの給付水準が切り下げられています。高齢化が目立つ障がい者は、介護保険利用へと一律に誘導され、状態に見合った介護（看護）が受けにくくなっています。

法人はこうした福祉情報を的確に把握し、皆さんにお伝えしていくことが一層重要になってきていると感じています。今年も福祉情報をできる限り正確に皆様にお伝えしながら、施設運営が利用者の期待に応え切れているかを検証していきたいと考えています。

理事長 杉井 則夫

コロナ禍の中でも、保護者との関係を深めたい

保育園は、子どもにとって安心できる居場所

コロナ禍の中、私たちは子どもの健康を守るための予防に努めてきた1年でした。

昨年、緊急事態宣言に伴い、保育園は4月20日から5月末までの期間、保護者の方に登園の自粛のお願いをしました。自粛明け、子どもたちは「待ってました！」とばかりに笑顔で登園し、久しぶりに会う友達と喜びあい、長い休み明けにもかかわらず、保育園全体が落ち着いていたことがとても印象に残っています。それだけ、子ども同士の繋がりや子どもにとって保育園に安心できる居場所があることを改めて感じました。

「5歳児運動会」に！・・・意欲・達成感・仲間との繋がりに そして何よりも、親に褒めてもらうことで自信に

行事も大切な役割

コロナ禍の中、園行事の縮小や中止、保育参加、個別面談、父母の会活動が中止となりました。その中で、保育園最後の運動会となる5歳児のための運動会を行いました。例年行っている、6月の合宿保育が中止となり、7月のまつりごっこでの太鼓は保護者の方に披露することができずに前半期を過ごしました。

子どもにとって行事は、目的に向かって挑戦する意欲を育て、うまくいかないことや負けた悔しさに葛藤を繰り返し、そこを乗り越えてできたことが喜びとなり達成感を味わいます。また仲間を応援し、仲間と共に頑張ったことや、やり遂げたことが集団としての高まりへと繋がっていきます。そして何よりも、お父さん、お母さんに見てもらい褒めてもらったことが、子どもの大きな自信となります。決して、行事だけが大きな影響を及ぼすとは思いませんが、子どもの発達において行事は欠かせない事だと改めて感じました。

保護者の方からは、「コロナ禍の中で、子ども達が楽しみにしながら、自信をもって披露できる場、それを保護者が見ることができる場を作って頂いたことに感謝します。」という感想を沢山いただきました。

コロナ禍2年目・・・健康と安全を考えた上、保護者との関係を深めたい

保護者からは「保育園での子どもの姿を見たい」という声が多く聞かれました。

私たちは、毎週のおたよりや生活ノートを通して、子ども達の姿や保育を丁寧に伝えることを心掛けてきました。しかし、保育士と子どものことを話す機会が少なかったことは、保護者との信頼関係を深めるまでにはいかなかったように思います。

コロナ禍2年目となり、コロナ禍でも出来ることは何か、どうだったらできるのか。やり方を見直し、出来ることを増やしていきたいと思います。

まずは、感染予防対策や子どもの健康の安全を考えた上で、保育参加・個別面談を再開し、保護者との関係を深めていきたいと思います。



1992年に風の子保育園保育士に就任。2013年に主任、昨年より副園長。

風の子保育園では、前園長の大滝さんが退職され、新しく白鳥昌世さんが園長に就任されました。

感染予防対策を徹底しながら、いままで通りのケアを

あすなろの家では、以前より特養看護師がデイサービスで勤務、デイ介護職員が特養で歩行介助、食事介助を行うなど、各サービスの壁を無くし職員全体でのご入居者・ご利用者との関わりを業務に組み込み、自立支援と生活を豊かにするケアを行ってきました。

コロナ禍では、面会とボランティアの受入れ、地域行事の制限を行い、例年に比べ生活の楽しみの機会は減ってしまいましたが、ご入居者の基本的な生活は極力変えず、今まで通りのケアを実践し、ご入居者の身体機能と認知機能はある程度保たれているのではないかと感じています。

しかし今年2月、2月2日からご入居者6名と職員1名が新型コロナに感染し、その内1名のご入居者が永眠されてしまいました。職員一同非常に悔しく、悲しく、申し訳ない思いでいっぱいです。心よりご冥福をお祈りいたします。

今後も感染の危険と背中合わせの状況はしばらく変わりませんが、感染予防対策を徹底しながら、ご入居者の自立支援と豊かな生活を守るためにできる限りこのケアを継続していきます。

今期は、コロナ対応で思うように進められなかった部分を丁寧に取り組みます

昨年度、新型コロナの対応で思うように進められなかった部分をもう一度丁寧に取り組み、4つの柱を深めます。

「本物のケア」は、介護ソフト導入によるデータ分析を活用する。また新しい職員に対しての自立支援の知識を伝える仕組みを作り、在宅利用者への展開を行います。「本物の接遇」は、「カッコいい接遇」を掲げ、見ていても聞いていてもカッコいい、魅せる接遇へ中身を育てていきます。「本物の繋がり」は、地域の中では高齢者だけが幸せであればいいということは決してない。地域が抱えている課題に対して何かできることはないか目を向けていきます。

「私たちが」に関しては、「自分たちの職場」「一緒に働く仲間」「あすなろの家で働くこと」について考えていき、働くこと・人・地域・経験・時代・職員のワクワク感などを含めた新しい事業の取り組みを開始します。

1年を経過した「ひかりサロン」は・・・

「ひかりサロン」は開設して1年3ヶ月が経過しました。今回は利用されている方々の様子についてご紹介いたします。

歩行練習・ポール体操・買い物を毎週行う中で、半年に1度身体機能を測定しています。

皆さんもご存じの通り、高齢者の場合、身体・認知機能を維持すること自体が難しいので、明らかに数値が上がった方はまだいませんが、ご利用者から聞かれる声として、「膝の痛みが無くなった」また「姿勢が良くなったね」「表情が明るくなったね」と友人から言われるそうです。中には、1時間の歩行&買い物で5000歩を超える方も数名おり、ご利用者の意欲向上や励みに繋がっていると思っています。

ショッピングリハビリは身体・認知機能の維持だけではありません。地域社会との繋がり、活性化などなど、まだまだ私たちのやるべきことは多いですが、コロナに負けず頑張ります。



仲間・保護者・職員の意思疎通の柔軟さ(チームワーク)あつての「ともの家」

日々の生活の関わることは、中止ではなく「その代わりに」を前面に

令和2年度開始直後の「緊急事態宣言」は、想像をはるかに超えた影響がありました。事業の執行はもちろん、仲間の日々の生活に関わること(店番や配達・外出など)に対して、判断が迫られました。中止の判断は簡単ですが、仲間の日常に大きなダメージを与えかねないこと、また、働くことと同じくらい大切な、仲間のご褒美を取り上げることになります。中止ではなく「その代わりに」を前面に出すという方向で模索した1年でした。

延長を重ねる「緊急事態宣言」に、症状が悪化してしまう仲間もいて、こればかりはどうしようもないと、頭を抱えてしまうこともありました。

「緊急事態宣言」でも、数名で出かける「小旅行」が予想以上の好評

しかし、悪いことばかりではありませんでした。遠方まで出掛ける旅行は、静岡県内に数名で出かける小旅行に。気の合う職員や仲間との外出は予想以上に好評でした。

発達に支障がある仲間たちのこだわりの強い部分が、問題行動としてクローズアップされがちですが、理解度に応じて、きちんと対応することで柔軟に適応できます。変化への対応が難しく、最初からスムーズにいくことの方が稀な彼らの世界です。プロとして当たり前の事かもしれませんが、これを理解し、じっと待つ、時には寄り添い、時にはぶつかり合う。そして、頭を抱えるような出来事にも、余裕をもって笑い合い、感動し合える職員にも逞しさを感じました。



《身延和紙づくり体験》

意思疎通の柔軟さ(チームワーク)あつてこそその「ともの家」

仲間・保護者・職員、この意思疎通の柔軟さ(チームワーク)があつてこそ「ともの家」であり、これを継続させたいと、強く感じた1年でした。

今期も福祉制度だけに振り回されない「ともの家」であり続けるために、視野を広く持つことのできる集団でありたいと思っています。

“計画相談事業所”の立ち上げを

そして、高齢化が進めば必ず来る、家族の形の変化に対して、仲間たちの混乱を受け止め、意思を尊重しながら進めていくことが出来る

“計画相談事業所”の立ち上げを具体的に進めます。ハード面での事業拡大は厳しくとも、人材とそのスキルで、多くの障がいのある仲間たちの「生きる」ことに寄り添えたら、こんな幸せはないと思っています。

ともの家主催 映画会 仲間の写真展 「星に語りて」 & オしらのすがた展



「きょうされん」結成40周年を記念して制作

ともの家は、3月5日～6日には一とびあ清水で上記映画会を開催、205名が鑑賞されました。併せて仲間の日常やとっておきの瞬間をとらえた仲間の写真展を観覧しました。

